

白氏文集 二十 杜陵叟・下

加藤 淳平

杜陵叟の後半と第二の詩、繚綾の前半を掲ぐ。杜陵叟の後半、農民の勞苦をお聞きになられたる皇帝の仁慈による免税も、已に農民の九割の納税を終へたる後なりしを詠ひ、繚綾、宮中の歌姬・舞姬らの衣裳を製作する絹布の、類ひ稀なる美しさを述ぶ。

杜陵叟・下

杜陵の叟・下

不知何人奏皇帝

知らず何人か 皇帝に奏せし

帝心惻隱知人弊

帝心の惻隱 人の弊を知る

白麻紙上書德音

白麻紙上 德音を書き

京畿盡放今年稅

京畿盡く放す 今年の稅

昨日里胥方到門

昨日里胥 方に門に到る

手持勅牒榜鄉村

手に勅牒を持ちて 鄉村に榜す

十家租稅九家畢

十家の租稅 九家畢り

虛受吾君蠲免恩

虚しく受く吾が君が蠲免の恩

(大意) 誰か分からないが皇帝に上奏したに相違ない。皇帝は惻隱の心をお持ちでいらつしやるから、農民が困つてゐることをお知りになると、白麻紙の上に民をお思ひの言葉を書かれて、長安近郊の地の今年の稅をすべて免税となさつた。昨日村長が家の門にやつて來て、手に勅語の觸れ書きを持ち、村に掛け札をする。しかし今や十軒の家のうち九軒が納税し終へてゐるから、吾らの皇帝の折角の免税の思し召しも無駄になつてしまった。

繚綾・上

繚綾・上

念女工之勞也

女工の勞を念ふ也

繚綾繚綾何所似

繚綾繚綾何の似る所ぞ

不似羅綃與紈綺

羅綃と紈綺に似ず

應似天台山上明月前

應に天台山上 明月の前

四十五尺瀑布泉

四十五尺の瀑布泉に 似たるべし

中有文章又奇絕

中に文章ありて 又奇絶なり

地舖白煙花簇雪

地は白煙を舖き 花は雪を簇らす

織者何人衣者誰

織る者は何人 衣る者は誰ぞ

越溪寒女漢宮姬

越溪の寒女 漢宮の姬

(大意) 繚綾といふ最高級の絹織物があるが、一體何に似てゐるだらう。羅、綃、紈、綺はどれも絹の織物だが、その何れとも似てゐない。譬へるならば漢土の天台山の明るい月の夜に、四十五尺の長さの瀧の水が流れ落ちるのを見るやうな美しさである。描かれた模様がまた珍しい優れたものである。白い煙りのやうな地の上に雪と見紛ふ花が群がり咲く。この織物を織るのはどんな人で、これを着るのは誰か。織るのは越の山地の谷間の貧しい女たち、着るのは宮廷の歌舞の女性たちである。

(平成二十九年七月六日受附)